

“经验”の動詞用法の希薄化の変遷について

古 橋 ふみ子

1. “经验”¹の動詞用法の希薄化の変遷について

“经验”は中国ではもともとは「試す」「実験する」意味であり、その後現代の意味になった。日本では江戸末期に「試す」「実験する」意味も現代の意味も見られる。『現代漢語詞典』6版(以下『現漢』とする)によると、“经验”は「実践によって得た知識、あるいは技能」であり、①に名詞用法を挙げ、②に動詞用法として“经历”を挙げている。もともとは「試す」「実験する」という動詞用法であったのが、現代では名詞用法で使われることが多い。ではなぜ、動詞用法の希薄化がおこったのか。“经验”と類義語の“经历”を合せて考察していく過程で、日本語の「経験」との関わりも含め、“经验”の動詞用法の希薄化の変遷を検討していくことにする。

1.1 「経験」は「実験」

1.1.1 中国の“经验”

まず、中国の“经验”からみていこう。

『四部叢刊』²によると、最初に『後漢紀』が記されているが、「試す」と訳される。(下線と、注のない訳は筆者、以下同様)

- (1) “禮事依舊儀參五經驗以識記自天子至于庶人百五十篇”(礼事は古代の礼式に倣っていろいろ試し、天子から庶民に至る百五十篇を予言の記録とする)『後漢紀』4C

また、『漢語大詞典』(以下『大詞典』とする。)でも“**经验**”は実験で確かめる意味として次の用例を挙げている。

- (2) “高平**郗超**……得重病。盧江杜不愆少就外祖郭璞学《易》卜、**颇有经验**。超令試占之，卦成，……”(高平の**郗超**……重い病氣にかかった。盧江の杜不愆は若いとき外祖父の郭璞について易の卜いを学び、試してみたところその占いはよく当たった。超は試しにこれを占わせ、結果がでた。) ³『搜神後記』卷二 晋・陶潛 ⁴ 7C

(1) も (2) も“**经验**”を「試す」あるいは「実験する」としているが、この「試す」「実験する」意味から派生して、薬の処方箋を表す“**经验方**”ということばがうまれたと思われる。北宋末の『重修政和證類本草』⁵にはいくつか用例があるが、主なものを次に挙げよう。

- (3) “**经验方** 治大小便不通**用白礬細研**”(経験方 大小便が通じない病を治療するには白礬(みょうばん)の細かく削ったものを使う。)
- (4) “**经验方** 治**妇人崩中用百草**”(経験方 婦人の子宮の出血の病を治療するには百草を使う。)

“**经验方**”の“方”には「薬の調合。処方」という意味があり、「試した処方」つまり「処方箋」という意味である。『重修政和證類本草』には「処方箋」の意味の“**经验方**”がいくつかみられ、ほかにも、宋代の書物には、『昭徳先生郡齋讀書志附志』(南宋 晁公武編)の中の標題に「陸宣公**經驗方**二卷」があり、同じく標題「沈存中良方十五卷」の文中に「其**經驗方**」など⁶の文字がみられる。

“**经验方**”は宋代の書物に用例があるが、その後の「試す」「実験する」意味は『大詞典』によると明代にも用例がある。

- (5) “**菩薩**道：‘我这**净瓶**底的“**甘露水**”，善治得**仙树灵苗**。’行者道：‘可曾**经验**过嘛？’**菩薩**道：‘**经验**过的。’行者问：‘有何**经验**？。’”(菩

薩が言った。「わたしのこの水差しにある「甘露水」、これが枯れ木を活かす薬だ。」行者が言った。「試したことがあるのか？」菩薩が言った。「試したことがあるとも。」行者が聞いた。「いかなる試した証拠がある？」⁷『西遊記』第二六回 16C

(5) も (1) と同様“経験”を「試した」としている。

中国では“経験”を「試す」「実験する」意味に用いていたが、日本にも「試す」「実験する」という意味で「経験」が伝わった。

次に、日本の「経験」の経緯を検討していくことにする。

1. 1. 2 日本の「経験」

江戸末期の『厚生新編』をみると「試す」「実験する」の意味でいくつか用例がみられる。

(6)「これは屢々歴試経験しその要たる所を決定せるなり。」「『厚生新編』(第24巻雑集)(文化8～弘化3 1811～46)⁸

『厚生新編』は江戸後期、徳川吉宗がフランスのショメルのおランダ語訳本を訳させた百科事典であり、治療に関わる用語も見られる。杉本つとむ(1998)には「経験方」「経験」が多く見られる。いずれも「試す」「実験する」の意味ととれるので、いくつか挙げる。(数字はページ数)

是亦社中屢々経験ある所なり (147)

従来自然に学家経験推理して (198)

是血を止る経験方なり (321)

第一此病者に属すること、経験諸書に出るが如し (499)

経験の書と其説大に異にして疑べし (543)

江戸末期にはさらに「試す」「実験する」意味の用例がみられる。

(7)「西洋気学ハ、皆経験ノ実ヲ主トスル風ナルニ、教ハ経験ノ実ナキ空理ヲ信ジ、」
「家塾生ニ示ス心得書」阪谷素(文久2 1862)

- (8)「異病ニテ死スル者アレハ其病ノ部切取り 経験ヲ遺シテ後日ノ為メニス」
『西洋事情』初・一 福沢諭吉（慶応2 1866）

さらにJ.C.ヘボンによって編纂された日本初の和英辞書『和英語林集成』にも「経験」がある。『和英語林集成』は初版、再版、三版まであり、初版、再版はやはり「試す」という意味だが、三版になると、「経験、一する」の部分が書き加えられている。⁹

- (9)「kei-ken ケイケン 経験」『和英語林集成』初版（慶応3 1867）

語釈は以下のとおりである。

「To prove, try or experiment with medicine. *Yamai wo* 一, to experiment with medicine in the cure of disease.」「ためす。治療をころみたり、試してみること。病を一、薬で病気を治療することを試してみる。」となる（訳は筆者）。初版と再版（明5 1872）はほぼ同じ語釈だが（再販では「with medicine.」の部分は省略）三版（明19 1886）になると「n. Experience : 一 suru, to prove ; to try or experiment; *Yamai wo* 一,（以下同文のため省略）」とあり、最初の「n. Experience : 一 suru,」（名詞、経験；経験する）の部分が書き加えられている。

ちなみに、現代の英和辞典¹⁰では「experiment」は「実験・試験」で名詞、動詞用法があり、「experience」も「経験・体験」で名詞、動詞用法があり明治初期とほぼ同様の意味である。『和英語林集成』が「experiment」から「experience」へと移行しているのは、「試す」「実験する」意味から現代の「経験」の意味に近くなっていることを意味する。

「experiment」を、他の辞書、『英和对訳袖珍辞書』（文久2 1862）では「試み」とし、『哲学字集』（明治17 1884）では「試験法」としている。どちらも「試してみる」であり、「実験」の意味が強い。また、「experience」を『英和对訳袖珍辞書』では「発明、功、試」とし、『哲学字集』では「経験・練過」とし、さらに「経験する」が「満る、腹を太くする」などといっしょ

に「Fill-ed-ing」の訳にある。「経験する」と「満る、腹を太くする」が同じ訳であるのが不思議であるが、「Fill」に「いろいろ試してみる」という意味を含ませているのだろうか。

「試す」の意味では、明治初期に訳された『西国立志編』や『日本教育史略』に用例がある。

(10) 「始めて蒸気の力を経験（＜注＞タメス）する器具を製せしが」『西国立志編』二・六 中村正直訳（明治3～4 1870～71）

(11) 「物理学及化学初歩并に経験、生理学」『日本教育史略』概言 小林儀秀訳（明治10 1877）

(9) の『和英語林集成』初版、再版では、「経験」を「薬で病気を治療することを試してみる。」と訳しているが、似た用例が『案愚楽鍋』にもみられる。¹¹

(12) 「腎薬もちひた経験^{けいげん}は、これから直に人力車」『案愚楽鍋』二編（明治4～5 1871～72）

ここでの「経験」は特に「けいげん」としているが「げん」は「ききめ、効果」であり、「腎の薬を使ったききめ」の意味であるとしている。¹²

その「ききめ、効果」の由来と考えられるのが1. 1. 1で述べた中国の“經驗方”である。江戸時代に漢方薬の処方として「本朝經驗方」という言葉が使われていたようであり¹³、『食^{シイ}勃^{ボルト}度經驗方』という書物もある。¹⁴「經驗方」は中国の北宋末の『重修政和證類本草』にあることは先述した。¹⁵これは今で言う漢方薬の処方箋であるが、日本の「経験方」は中国の「經驗方」を倣ったものであろう。

ここまで見てくると、日本の「経験」は中国の「薬効を試す」「試してみる」という意味が江戸末期から明治初期にかけて伝わり「実験」の意味になったと思われる。用例（9）の『和英語林集成』の初版、再版からもその経

緯が伺われる。

1.2 現代の“经验”と「経験」

1.2.1 現代の“经验”（中国）

清代になると、“经验”は現代の意味になる。『紅樓夢』には次のような用例がある。¹⁶

- (13) 虽然住了两三天，日子却不多，把古往今来没见过的，没吃过的，没听见的，都经验过了。（数日居ただけで、日数は多くはなかったけれど、今まで見たこともないもの、食べたこともないもの、聞いたこともないこと、すべてが経験になった。）『紅樓夢』第四十二回 清代初期
- (14) 况且有本事的人，未免有些调歪，老太太还有什么不会经验过的。（まして能力のある人ならいささか良くない行いもするだろう。奥様は何もかも経験済みのはずだ）『紅樓夢』第七十八回 清代初期

「実験」の意味から現代の意味に変化した過程のひとつとして、参考になると思われる“经验”が『新爾雅』（沈国威1995）¹⁷にある。

『新爾雅』は中国の古典『爾雅』に基づいて、清代末期に書かれた西洋の学術用語集であり、沈国威（1995：2）によると、「日本書の翻訳或いは翻案であったことは、ほぼ間違いない」としているので、日本の「経験」の影響を大きく受けていると思われる。ここでは、“经验”の意味はいずれも現代の意味である。

- (15) 「從研究之對象而以經驗的、歸納的。排列一定秩序者名曰經驗的科學。」
（研究の対象によって経験的、帰納的とする。一定の秩序に従って配列することを経験的科学と言う。）
- (16) 「以事物上經驗。而研究其精神現象者。名曰經驗的心理學。研究精神之本體。不主經驗者。名曰思辨的心理學。」（事物上の経験でその精神現象を研究することを、経験的心理学と言うが、精神の本体を研究することは主に経験とは言わないで思弁的心理学と言う。）（14）（15）『新

爾雅』积教育（光緒29 1903）

- (17) 群學研究法有二。一合理法。一經驗法。合理法同演繹法。經驗法同歸納法。（群学研究法には二つある。一つは合理法で、もう一つは經驗法である。合理法は演繹法と同じであり、經驗法は歸納法と同じである。）『新爾雅』积群 第一篇 総积（光緒29 1903）

(13) から (17) の用例にあるように、清代になると“经验”の現代の意味があらわれる。

さらに近世になると、魯迅の小説にも現代の意味がみられる。魯迅は1902年に日本に留学し、医学から文学の道へと進むが、留学中多くの日本文学の影響を受けた。“经验”の意味もあるいは日本に留学中に影響を受けたことばかもしれない。

- (18) 初由经验而入公論，次更由公論而入新经验（最初は經驗によって公論に進み、次に公論に基づいて新たな經驗に進む）『攻・科学史教篇』（1907）¹⁸

中国では清代から“经验”の現代の意味があらわれ、定着したことがうかがわれる。一方日本では江戸後期から末期にかけて「試みる」「実験する」意味と同時に現代の「経験」の意味の用例もみられる。次に日本の現代の意味の「経験」を検討することにする。

1.2.2 現代の「経験」（日本）

「経験」はそもそも「実験」であったことを述べてきたが、中国では清代初期の『紅樓夢』に現代の“经验”の意味がみられた。次に、日本の現代の意味の「経験」を検討していく。

江戸末期から明治初めにかけて、現代の「経験」の意味の用例がみられるので次に挙げる。¹⁹

- (19)「嘗テ經驗セル十二ノ患者ヲ左ニ略挙ス」『遠西医方名物考』（二十一）
宇田川榛斎 訳 宇田川榕庵校補（文政5 1822）

佐藤亨は「経験」は『遠西医方名物考』で新たに訳語として作り出されたとし、現代の意味としているが、筆者には「12人の患者にいろいろな薬や治療を試したり実験したりした」という意味にとれ、この用例は現代の意味の「経験」ではなく「実験」の用例にするのが適当と思われる。

(20)「予は巻飴をよしとおもへども、名づけはじめし人に遭ねば、経験当否は終に得がたし」『随筆・兎園小説別集』中（文政9～天保3 1826～32）

(21)「往昔市井瑣々たる事の既に伝を失ふものは、経験すべきよしなきに、只古書に拠てことはりの当然たるを取らんのみ。」『随筆・兎園小説別集』・中

(22)「鑄工ハ経験ニ因リテ。彈ヲ型ヨリ出スベキ適度ヲ知り。『海上砲術全書十卷6ウ』（J.N.カルテン著、宇田川榕庵ほか訳（安政1 1854）

(23)「天ハ自ラ助ルモノヲ助クト云ル諺ハ、確然^{タメシコロシ}経験シタル格言ナリ、」『西国立志編』一・一 中村正直訳（明治4 1871）

(24)「開化ノ経験ニ因テ、街路ヲ割出シ、井井法アリ、」『米欧回覧実記』四 桑方斯西哥ノ記 下 十二月二十一日晴 久米邦武（明治4 1871）

(25)「譬へば、ここに頗ぶる経験して事理に通ずる人のあらんに」『自由之理』三 中村正直訳（明治5 1872）

(26)「此等の物語は其人親しく経験なし、若（も）しくは親しく見聞させる真実（まこと）の事蹟に相違なけれど」『小説神髓』上・小説変遷 坪内逍遙（明治18～19 1885～86）

用例には英語やオランダ語の翻訳もあるが、すべて「経験」と訳されている。

次に、これまでの用例から品詞ではどのように区分されるかみていくことにする。品詞の用例には名詞も動詞もあるが、用例別に品詞を分けると次のような表になる。

〔表1〕

		中国 (13例)	日本 (15例)
用例	動詞	(1) 4C (2) 7C (5・3例) 16C (13) (14) 17C	(6) (9) (10) (19) (21) (23) (25)
	名詞	(3) (4) 12C 頃 (15) (16) (17) 1903 (18) 1907	(7) (8) (11) (12) (20) (22) (24) (26)

(網掛けは「試す」「実験する」の意味で、他は現代の「経験」の意味。)

「試す」「実験する」という意味と現代の意味の「経験」を合わせた27例中、中国では動詞の用例が7例、名詞の用例が6例で、動詞の用例は4C、7Cと古い時代にみられるが、16、17Cにも動詞用法がある。「試す」「実験する」意味は16C頃まで使われていたようである。日本では15例とも江戸末期から明治初期にかけての用例で、動詞の用例が7例、名詞の用例が8例であるが、どちらにも「試す」「実験する」意味も現代の意味もある。

『明治のことば辞典』(1986:126-128)では1867年(慶応3)から1915年(大正4)までに発刊された53冊の辞書から「経験」を引いているが、その中の漢語辞書をいくつか挙げよう。

〔増補漢語字引・明9〕 ココロミニアツテミル

〔言海・明24〕 験^{タメシ}ヲヘルコト。ココロミ。タメシ。

〔熟字以呂波引漢語大字典・明25〕 タメシテミル。

〔日本大辞書・明26〕 ココロミ。＝タメシ。

〔日本大辞林・明27〕 ためし。こころみ。

〔辞林・明44〕①実際にためしこゝろみたること。こゝろみ。ためし。
②こゝろみ又はためしによりて得たる智識又は技術。③感官を通じて得たる知覚。又、知覚によりて結合せられたる知識。

ほとんどの辞書が「試みる」「試す」と訳されているが、現代の意味に近いものもある。

〔音訓新聞字引・明9〕シルシヲヘル

〔日本立志編字引・明15〕其実地ヲフミ、シタシク其事ヲココロミル。

〔高等科用普通読本字引・明21〕マヘニソノコトニアツカリテ、オボエアルコトヲイフ

〔日本大辞典・明29〕自ら其事を経こゝろむる事。ためす事。

〔和英大辞典・明29〕経験ガタラス。経験ニ乏シイ。経験ニ富ム。経験アル人。薬ヲ経験スル。(英文は省略)

〔農家節用農業辞典・明39〕経過セシ跡ニツキ検知スル所ヲイフ。

『和英大辞典』(1896 F.Brinkley南條文雄・岩崎行親編)には「薬ヲ経験スル」(薬を試してみる)という意味があるが、前に現代の意味の引用を4例挙げ、最後に「試す」意味の引用を1例挙げている。これは現代の意味が多用されていることを反映していると思われる。明治29年の発行であるが、明治も半ばを過ぎると現代の意味が多用され始めたと思われる。

漢語辞書の中には「ココロミ」「タメシ」の名詞、動詞形としているが、なかには少し変わった意味の辞書もある。

〔布令字弁・明1～5〕[ケイゲン]ミチノシルシ。

〔輿地誌略字類・明8〕行キタ処ニテハッキリト見トメタコト。

〔画引小学読本便覧・明9〕イチイチシラベタダス。

〔高等科用普通読本字引・明21〕マヘニソノコトニアツカリテ、オボエアルコトヲイフ。

〔高等小学読本字引〈関〉・明24〕しきたりにておぼふ。

〔新案帝国用文・明30〕じっしする。

〔新編熟語字典・明33〕コトニアタリミタルコトライフ。

〔農家節用農業辞典・明39〕経過セシ跡ニツキ験知スル所ライフ。

「タメス」「ココロミル」から少しずれてはいるが、いずれも現代の「経験」の意味を含んでいる。

1.3 辞書からみる“经验”と“经历”

『現漢』では“经验”は「実践によって得た知識あるいは技能」で、①に名詞用法、②に動詞用法として“经历”をあてている。（訳は筆者、以下同様）

名詞 由**实践**得来的**知识**或**技能**。（実践によって得た知識あるいは技能）

動詞 **经历**：**体验**：这样的事，我从来没**经验**过。：（体験：こんなこと、今まで経験したことがない。）

動詞は“经历”としているので、“经历”の語釈をみると、①に動詞、②に名詞としている。

① 動詞 **亲身见过、做过或遭受过**。（自ら見たり、したりあるいは出会うこと。）

② 名詞 **亲身见过、做过或遭受过的事**。（自ら見たり、したりしたことあるいは出会ったこと。）

中級程度の中国語を学ぶ外国人用の辞書『汉语教与学词典』（2011）では、“经验”は①に名詞、②に動詞としやはり“经历”を当てている。

① 名詞 **experience 实践中得来的知识或技能**。（実践の中で得た知識や技能）

② 動詞 **go through ; experience 通过自身的实践来认识事物**。：**经历**（自

分の実践を通して物事を認識する。：経験する。

動詞の意味に“经历”を当て、“经验”と“经历”を類義語として説明を加えている。では、他の外国人用辞書ではどうかと見ると、『汉英词典』『简明汉英词典』『汉英双解词典』では、次のように表記している。

いずれも『汉语教与学词典』と同じく、「经验」は名詞のみか①に名詞、〔表2〕

漢語 \ 辞典	汉英词典 (1978)	简明汉英词典 (1982)	汉英双解词典 (1997)
经验	① experience ② go through ; experience	(名) experience	(名) experience
经历	go through undergo experience	(动) experience ; undergo ; go through	(动) 亲眼见过或亲身 做过, 遭受过 undergo

②に動詞とし、「经历」は動詞である。『汉英词典』のみ2番目の項目に動詞をあてているが、『简明汉英词典』『汉英双解词典』では、名詞しか挙げていない。これは、年数が経るにつれて“经验”の動詞用法が名詞用法になってきたことを物語るのではなかろうか。

『現漢』や『汉语教与学词典』を初めとするその他の外国人用辞書も①に名詞用法、②に動詞用法とし、“经验”の動詞は“经历”としている。逆に日本語では「経歴」には動詞用法はない。また、中国の辞書では“经验”の動詞用法が薄れていくことを述べ、もし動詞用法を使いたければ“经历”となる。さらに“经历”は“体验”として「体験」の意味を含ませている。中国では“经验”は名詞として扱っている。

中国人に聞くと、動詞として「経験する」は“经历”を使い、“经验”は名詞としては“有经验离婚”のように“经验”を使うそうである。

主に明末から清初めにかけて表れた語句を収録したとする『近現代辞源』

にも“经验”の記載があり、“由实践得来的知识或技能”（実践で得た知識や技能）とし、名詞に扱っている。但し、“经历”の記載はない。“经验”も“经历”も古典にあるにもかかわらず“经验”が記載されているのは、日本から入った新しい語句とでもとらえているのだろうか。²⁰

1. 1. 1の「中国の“经验”」の用例(1)～(5)で述べたように、“经验”はもともと中国で「試す」「実験する」意味で使われていたにもかかわらず、明末から清初めにかけて日本から伝えられた漢字と認識されている。しかも、意味は「試す」「実験する」ではなく、現代の意味に置き換えられた“经验”である。従って、(13)～(17)の現代の意味の用例も、日本から伝わった“经验”であると考えているようだ。日本に「經驗」が現れるのは『厚生新編』(1811～46)が初出であるので、明代に中国に伝わったとは考えにくい。

日本から中国に伝えられたとする説は他にもある。

安井惣二郎(1968:80)は「「經驗」という語の起源」の中で、「經驗」は中国語の古典的語彙の中に存在しなかったとし、「明治のごく初期の日本で、Experiment、Experienceの訳語として造語され、明治後期に中国に逆輸出されたと考えられる」と述べている。また、高名凱、刘正垓(1958:82-83)も「纯粹日语（即日语原有的而非用汉字翻译欧美词汇成员的日语的词）来源的现代汉语外来词」（「純粹日本語（すなわちもともと日本語にあり、漢字で欧米語語彙を翻訳したものではない日本語の語句）を由来とする現代中国語の外来語」の中に「經驗」を入れている。この例の中には「体験」も入っている。²¹さらに、また、佐藤亨(1986:251)は「經驗」を漢籍に典拠があるか不明であるとし、松本守(2000:17)も「經驗」と「体験」は漢籍に用例がみられないようだ、と言っている。筆者は漢籍に根拠を見出す手段として『四庫全書』や『四部叢刊』を利用し、前後の記述から熟語と判断できれば中国語の初出の根拠とする。

明治元年から昭和20年までの間に誕生した新語、俗語を対象とした、『明治大正新語俗語辞典』（新装版）には「体験」と「実験」の記載があり、「経

験」「経歴」はない。ここにも「体験」は「日本から中国に渡った語」とされている。²² 記載のない「経験」や「経歴」は恐らく、江戸末期までにすでに日本で造語された漢語と認識されていたものと思われる。

中国人の研究者を含め、日本人の多くの研究者は「経験」「体験」を日本で造語された漢語としている。「経験」は特に江戸末期に翻訳された漢語と認識されている。しかし用例(1)から(5)で述べたように「経験」は中国の古典に散見するもので、中国から伝わった漢語と解釈でき、意味変化も行われた。「体験」も後述するように用例(28)で『朱子語類』を挙げているように、中国から伝わった漢語とみることができる。

ところで、“**经历**”の初出はというと、『大詞典』では「年月が経過する」意味で『尚書』から用例を引いている。

(27) “弗克**经历**嗣前人恭明德”(代々先人が恭しみ明らかにしてきた徳を嗣ぐことができないであろう)『尚書 君奭』(BC5～6)²³

さらに「経験(する)、見聞(する)」意味で、宋代の用例を引いている。

(28) 以其爲准將、必**經歷**老成。(其れを以って准の將と爲すならば、必ず豊かな**経験**となるであろう)『吊五木』詩序(宋 文天祥)

日本の「経歴」の初出の用例は『日国』では「歳月が過ぎること。年月が経過すること」の意味で『浄業和讃』(995～1335)を挙げている。²⁴

1. 4 “**体験**”と「体験」

「体験」は「直接自分自身が経験すること」であり、「経験」を踏まえて「体験」がなりたつ。また、「経験」と「体験」は類義語である。『日国』の用例をみると、「経験」の用例より「体験」の『翁問答』(1650)のほうが古い。『日国』では中国の用例としてはさらに遡り朱熹の『朱子語類』を挙げているが、『大詞典』でも同じ用例を挙げている。次に『朱子語類』と『翁問答』の用例「を挙げる」。

- (29) “讲论自是讲论，须是将来自体检”「講論自是講論、須是将来自体験」
(論述は論述であり、体験することによって導かれたものに過ぎない。)

『朱子語類』一一九 (1270)

- (30) 「かくのごときの賢範をよく体験して明に弁するべし」『翁問答』下・
末 中江藤樹 (慶安3年1650)

作者の中江藤樹は江戸前期の儒学者である。朱子学や陽明学に通じていたので、当然『朱子語類』にも精通していたと思われる。ここでは孟子の性善説を取り上げ、堯、舜、文王、周公のような聖人の教えをよく体験して物事の道理を心得るようにと説いている。「体験」の初出は朱熹の『朱子語類』である。この『翁問答』の「体験」は『朱子語類』の「体験」から取り入れたと考えられる。

佐藤亨 (2007:224) は「経験」と「体験」の違いを次のように述べている。

類義語の「体験」は一回ないし数回の経験をいう。「経験」はなんとなく、また、長期にわたっての場合にも使う。したがって「経験を積む」「経験があさい」の言いかたができるが、「体験」ではできない。

「経験」と「体験」は同じ「～験」がつき類義語であるが、語構造が異なり、「経験」は動目構造で、「験」(ためしたり、調べたり、試みたり)することを「経る」(経過する、通る)ことであり、「体験」は修飾構造で「体」(自分)で「験」(ためしたり、調べたり、試みたり)することで、「体験」のほうが重い意味を含んでいる。

また、中国語の“经验”と“体验”も日本語と同じように語構造が異なり、“经验”は“验”を“经”、“体验”は“体”で“验”することであり、動詞用法しかもたない。

佐藤亨が言うように、「経験」は積めるが「体験」は積めない。「戦争体験／体験談／初体験／体験入学／体験隊」はいずれも「経験」に置き換え

ては言わない。「体験」は強く印象に残るできごとであり、その人の行為や実地での見聞に限定して使うことが多い。²⁵

では、“**经验**”は日本の中国語辞書ではどう記述されているか。

『中日大辞典』（3版）は①では経験（する）、②では“**体验**”としている。

『白水社 中国語辞典』では中国の辞典と同様に①は名詞用法のみで、②に「経験する」として動詞用法を挙げている。

やはり、日本の中国語辞書も中国の辞書と同様、“**经验**”は動詞用法が薄れて名詞になったことを物語っている。

これまでみてきたことから、“**经验**”は名詞用法を主な意味とし、動詞用法は二義的な意味としている。

「経験」「経歴」「体験」の初出をそれぞれ中国と日本で比較すると、以下のような表になる。

「経験」「経歴」は中国の古典にあり、「体験」も宋代に見られる。一方、

〔表3〕

	日 本	中 国
経験	『遠西医方名物考』（二十一）（文政5 1822） 〔佐藤2007〕（19）（V）	『後漢紀』（4C）〔『四部叢刊』〕（1）（V）
	『随筆・兎園小説別集』中（1826～32） 〔『日国』〕（20）（N）（21）（V）	『搜神後記』卷二 晋・陶潛（7C） 〔『大詞典』〕（2）（V）
経歴	『浄業和讃』995（『日国』（書誌情報、文政8（1825））（用例無）（V）	『尚書』（BC6～5）〔『四部叢刊』〕（27）（V）
体験	『翁問答』下・末（慶安3 1650）〔『日国』〕（30）（V）	『朱子語類』一一九（1270）〔『大詞典』〕（29）（V）

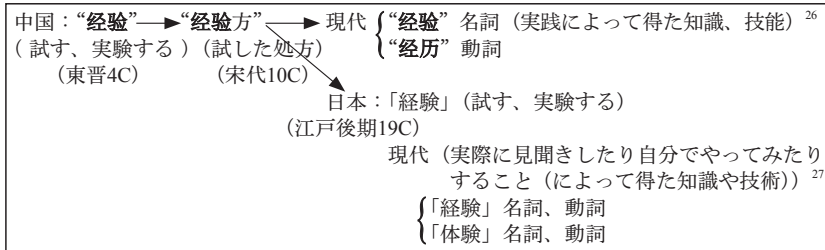
（（ ）は用例番号、（V）は動詞用法、（N）は名詞用法）

日本では「経験」「経歴」は江戸末期に用例が見られるが、「体験」はそれより早く江戸初期に用例が見られる。

中国の辞書や、外国人用の辞書ではいずれも名詞用法を最初に挙げ、動詞

用法は2番目に挙げ“经历”としている。“经验”は名詞用法として扱われている。

1.5 “经验”の意味の変遷と、日本に伝わった「経験」の経緯と意味の変遷



1.6 「経験する」と「経験した」

「経験」は名詞、動詞用法とあるが、どういう使われ方をするのか、現在形と過去形について比較してみた。

「経験する」と「経験した」では、普段どちらをよく使うか、筆者の語感では「経験した」をよく使う。「経験」は「経る」に過去の意味が含まれているように思われる。ちなみに「少納言」(「現代日本語書き言葉均衡コーパス」)で「経験する」「経験した」と、「経験」の動詞用法を担う「体験」の「体験する」「体験した」の用例数を調べると、「経験する」は383件で、「経験した」は898件である。また、「体験する」は415件で「体験した」は536件であった。どちらも「～した」の用例の方が多い。²⁸ 話し言葉が多いと思われる「Yahoo知恵袋」「Yahooブログ」だけを見ても、「経験」も「体験」もやはり「～する」よりも「～した」の用例のほうが多い。どちらも過去形としてよく使われることが明らかである。

「私の経験」「私の体験」、「私の経験(体験)をお話しましょう。」と言えばもはや「私の経験(体験)したこと」という過去の意味になる。名詞形のみで過去形の意味を表し、さらに過去形で使われる場合が多いと考え

られる。

1.7 まとめ

中国の“**经验**”は『後漢紀』（4C）や『搜神後記』（7C）にあるようにすでに古典にあり、何かを試したり、試みることに、つまり「実験する」意味であったが、日本の「**経験**」は恐らくこの「実験する」意味が江戸時代に日本に伝播し、『厚生新編』のような百科事典の記述に使われたのであろう。また、『和英語林集成』や、『西国立志編』などの訳にも反映されたと思われる。一方、現代の意味の用例は清代に見られ、日本においても江戸後期には小説や翻訳本に用例が見られる。

“**经验**”は〔表2〕の『**汉英词典**』（1978）にみられるように、現代になっても動詞用法があったが、『**简明汉英词典**（1982）』、『**汉英双解词典**（1997）』になるともはや名詞用法のみになり、動詞用法は“**经历**”である。その後同様に『**现漢**』や『**汉语教与学词典**』も、“**经历**”は動詞用法として表記され、“**经验**”は名詞用法として扱われるようになった。こうした“**经验**”の動詞用法の希薄化が“**经历**”の動詞用法を招いたと言えるであろう。

また、「試す」や「実験する」は自らの意思で試みることであり、積極的な意味をもち動詞性要素をもつ。一方、現代の意味の“**经验**”、「実践によって得た知識、技能」は結果であって、自らの意思で試みることではない。結果を示す例として『**汉语教与学词典**』に次のような例がある。（訳は筆者）

「制作**这种软件**，他有**丰富的经验**」（このようなソフトウェアが作れるのは、彼に豊富な経験があるからだ。）

「**历史的经验**值得**记取**」（歴史的な経験は記憶に留めておく価値がある。）

「他是一位很有**经验的**大夫」（彼は経験豊かな医師だ。）

など、いずれも過去のできごとを表している。

「試す」「実験する」という積極性が動詞の要素を持ち、逆に現代の“**经验**”は結果を意味する名詞性要素しか持たない。このような意味の変化も

“经验”が動詞の希薄化を招いたと言えるのではないか。

注釈

- 1 “” 書きは中国語、「」書きは日本語を表記する。
- 2 『四部叢刊』（電子版）参照（以下『四部叢刊』とする）。
- 3 訳は先坊幸子、森野繁夫2008『陶潜 搜神後記』参照
- 4 『大詞典』では作者を「晋の陶潜」としているが、『大漢和辞典』では、「潜の卒年と、書かれている内容の年数に違いがあることから偽であり、隋以前の作品である。」として、晋を特定していない。
- 5 『四部叢刊』電子版参照
- 6 宋代の書物は『四部叢刊』電子版参照
- 7 訳は村上知行訳『完訳 西遊記』（上）参照
- 8 佐藤亨（1986:300）参照。
- 9 以下（9）から（11）の用例は『日本国語大辞典』2版による。
- 10 『大きな活字のコンサイス英和辞典』第13版
- 11 松本守「明治期の「経験」「実験」「試験」」（『専修国文』67号）2頁参照
- 12 同上による
- 13 日本東洋医学雑誌 第45巻第3号（1995）の「要旨」に次のような説明文がみられる。
「葛根湯加川芎辛夷の出典に関しては従来より本朝経験方と記され」
- 14 杉本つとむ（1998：96）
- 15 『四部叢刊』（電子版）参照（以下『四部叢刊』とする。）
- 16 『漢語大詞典』参照
- 17 沈国威1995『『新爾雅』とその語彙 一研究・索引・影印本付一』参照
- 18 『近現代辞源』「经验」の項目参照。
- 19 （18）（22）（23）は佐藤亨（2007:223）の用例、（19）（24）（25）は『日本国語大辞典』2版の用例、（21）は「広島女子大学文学部紀要第14号」1979（松井利彦「近代漢語の伝播の一面」）の用例。（20）の用例は筆者が『随筆・兎園小説別集』から採用した。
- 20 『近現代辞源』編者黄河清は「自序」で「沈国威の資料によるところが大きい」と述べているが、“经验”が日本語の造語であるとする説も沈国威の説を踏襲したのであろうか。
- 21 「体験」については次章1.4「“体験”と「体験」」で述べる。
- 22 凡例に「日本から中国に渡った語」とした語はさねとうけいしゅう「中国語のなかの日本語」（『言語生活』181・182号 昭和42年）による」とある。
- 23 訳は『新釈漢文大系』書経（上）参照
- 24 書誌情報で調べると、『浄業和讃』は文政8（1825）一道編とある。

- 25『デジタル大辞泉』小学館
 26『現代漢語詞典』6版
 27『新明解国語辞典』7版
 28 対象資料は書籍、雑誌、新聞、白書、教科書、広報誌、Yahoo知恵袋、Yahooブログ、韻文、法律、国会議事録で、教科書は2007年、Yahooブログは2008年、他は2005年を最終とした資料なので、時代の変化に影響されやすいことばの資料としては必ずしも新しいとは言えない。

〔参考文献〕

- 貞方良助『夢醒真録』附録1869 立教大学海老沢有道文庫デジタルライブラリ
 假名垣魯文作、小林智賀平校注 1967『安愚楽鍋』岩波文庫 岩波書店
 久米邦武編 1878発行 1975復刻『特命全権大使 米欧回覧実記第2巻』宗高書房
 高名凱・刘正堃 1958『現代汉语外来词研究』文字改革出版社
 呉承恩著 村上知行訳 1977『完訳 西遊記上』現代教養文庫 社会思想社
 Smiles, Samuel中村正直訳1981『西国立志編』講談社学術文庫 講談社
 佐藤亨 1986『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社
 佐藤亨 2007『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
 佐藤亨 2013『現代に生きる日本語漢語の成立と展開 共有と創生』明治書院
 実藤惠秀 1970増補版『中国人 日本留学史』1960第1版 くろしお出版
 『四部叢刊：電子版』（原文及全文検索版）2001 萬方数拠電子出版社
 沈国威編 1995『『新爾雅』とその語彙 一研究・索引・影印本付一』白帝社
 杉本つとむ 2006「近代漢語を検証する」『国文学 解釈と観賞』（71－6）至文堂
 杉本つとむ 1998『江戸時代西洋百科事典・『厚生新編』の研究』雄山閣出版
 杉本つとむ 1959「近世における外国語の摂取とその影響―近代日本語史の一断面―」
 『国語と国文学』特輯号 東京大学国語国文学会
 先坊幸子、森野繁夫 2008『陶潜 搜神後記』白帝社
 曹霈作、伊藤漱平訳 1969『紅樓夢』中 中国古典文学大系 平凡社
 滝沢馬琴編「兎園小説別集」中『日本随筆大成』4 1974日本随筆大成刊行会昭和3年
 刊の復刊 吉川弘文館
 高野繁男、日向敏彦監修・編 1998『「明六雑誌」語彙総索引』大空社
 坪内祐三編 2001『明治の文学第8巻泉鏡花』（義血侠血2）筑摩書房
 （宋）唐慎微撰 1965『重修政和證類本草』上海商務印書館
 中江藤樹 1650『翁問答』加藤盛一校註 1936 岩波文庫 岩波書店
 野村雅昭編 2013『現代日本漢語の探求』東京堂出版
 福沢諭吉著 服部礼次郎編2003『福翁百話』慶応義塾大学出版会

福沢諭吉 Saucier, Marion・西川俊作編2009『西洋事情』慶応義塾大学出版会
松井利彦「近代漢語の伝播の一面」(「広島女子大学文学部紀要第14号」1979)
松本守「明治期の「経験」「実験」「試験」」『専修国文』67 2000年9月 専修大学
村上知行訳 1976『完訳 西遊記 上』社会思想社
文部省編 1886原本発行1981発行『日本教育史略』明治教育古典叢書15 国書刊行会
安井惣二郎 1968「日本の哲学用語 ―その起源と問題―」『滋賀大学教育学部紀要18』
人文科学・社会科学・教育科学第16－18 1966－68

〔日本語辞書〕

堀達之助編 初版1862複製版1973『英和对訳袖珍辞書』
井上哲次郎〔ほか〕編 1881初版刊1980復刻版『改訂増補哲学字彙』名著普及会
愛知大学中日大辞典編纂所『中日大辞典』初版1968 第3版 2010 大修館書店
惣郷正明・飛田良文編 1986『明治のことば辞典』東京堂出版
樺島忠夫・飛田良文・米川明彦編 1996『明治大正新語俗語辞典』新装版 東京堂出版
『日本国語大辞典』2版 1972第1版 2000第2版 小学館
Hepburn, J. C. 2000～2001『和英語林集成』初版・再版・三版対照総索引 港の人
Medhurst, Walter Henry 著 加藤知己・倉島節尚編2000『英和・和英語彙一複製と研究・索引』三省堂
伊地智善継編 2002『白水社中国辞典』白水社
『大きな活字のコンサイス英和辞典』第13版 2002 三省堂
山田忠雄 2005『新明解国語辞典』7版 三省堂
李漢燮編 2010『近代漢語研究文献目録』東京堂出版

〔中国語辞書〕

『汉英词典』1978 北京外国语学院英語系《汉英词典》編写組編 商務印書館
『简明汉英词典』1982 北京語言学院 北京語言文化大学出版社
『漢語大詞典』1988～1994 上海辭書出版社
王还主編『漢英双解詞典』1997 北京語言文化大学出版社
黄河清編『近現代辭源』2010 上海辭書出版社
『古代漢語詞典』2011 四川出版集團・四川辭書出版社
施光亨・王紹新主編 2011『漢語教學詞典』商務印書館
『現代漢語詞典』6版 2012 商務印書館
『古漢語常用詞詞典』2012 中国大百科全书出版社

KOTONOA「現代日本語書き言葉均衡コーパス www.kotonoha.gr.jp/demo/」